

27年6月 月例研修会
「当麻の里を訪ねる」

資料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ担当

(6月8日)

當麻寺 宗派：高野山真言宗ならびに浄土宗
 本尊：本堂・當麻曼荼羅 金堂・弥勒仏 講堂・阿弥陀如来

推古天皇20年(612)、用明天皇の第3皇子麻呂子親王(當麻皇子・聖徳太子の弟)が河内国山田郷に二上山萬法蔵院禅林寺を建立。天武天皇九年(681)に孫の當麻真人国見が現在地に遷造し、百済の恵灌が導師で落慶法要を行い寺号を當麻寺とした。此の地は役小角の領地でもあり、小角の本尊であった孔雀明王一軀を金堂の本尊・弥勒仏の胎内に奉籠している。創建当初は金堂の弥勒仏が本尊で、南都六宗の一つ三論宗であったが、空海が留錫して真言宗となり、平安時代中期からは當麻曼荼羅図と中将姫伝説が阿弥陀信仰と結び付き、浄土宗の霊場として多くの人々の信仰を集める様になり、現在は曼荼羅堂の當麻曼荼羅が本尊となり、浄土宗と真言宗の両宗派で護持されている。

本堂(曼陀羅堂・天平時代)、當麻曼荼羅厨子(天平時代)、双塔をなす東塔と西塔(天平時代の三重塔)は創建当初の姿で何れも国宝、金堂と講堂(鎌倉時代)は重要文化財。

彫刻では、金堂の本尊・弥勒仏坐像(白鳳時代)は国宝。乾漆四天王像(白鳳時代)が重要文化財で、講堂の本尊・阿弥陀如来坐像(平安時代)、十一面観音立像(鎌倉時代)などが重要文化財である。梵鐘は白鳳期の最古の名鐘で国宝。本堂の南側に立つ八角形石灯籠は白鳳時代の作で重要文化財。



當麻寺本堂

當麻曼陀羅図 浄土三部經のうち觀無量壽經に基づくもので、觀無量壽經變相図と言う。阿弥陀如来・觀音菩薩・勢至菩薩の三尊を中心とする西方極樂浄土の景觀を表し、極樂浄土図の代名詞となっている。

綴織當麻曼陀羅図 国宝 天平七年(763)に中将姫が蓮糸を五色の色に染め、綴れ織りで織り上げたと言われ、當麻曼陀羅図の原本(実際は金糸を併用した上質の絹糸で織成)である。

中将法如大比丘尼(中将姫)

藤原鎌足の曾孫・藤原豊成の娘で、十六才の時に當麻寺へ入り、十七才で剃髪し法如尼と改名。修行の中で称讚浄土經千巻を當麻寺に納め、念仏三味の功德を行い、生きながらに阿弥陀如来の極樂浄土を拝みたいと願望しておられた。ある時、不思議な尼の助けを得て有名な蓮糸の綴織當麻曼陀羅を織り、二十九才の春、阿弥陀如来のお迎えを受け西方極樂へ歸られたと伝えられる。



聖衆来迎練供養会式 国・無形民俗文化財



毎年五月十四日、中将姫の命日に二十五菩薩来迎図を表した行事が行われ、「當麻会式」「當麻レンソ」「面かつぎ」等の名で親しまれる。寛弘二年(1005)『往生要集』を著して浄土信仰を説いた恵心僧都源信が當麻曼陀羅に歸依した中将姫を慕い、聖衆来迎の有様を見るため、仏面と装束を寄進したのが始まりとされる。曼陀羅堂を西方極樂に擬し、東方に在る娑婆堂とに來迎橋を架けて舞台として、西方極樂から二十五菩薩の仏面と装束を着けた菩薩が人間界へ來迎。中将姫が觀音菩薩の持つ蓮台に迎えられ、練道を西方極樂へと歸る儀式です。

護念院 宗派：浄土宗の塔頭寺院 本尊：阿弥陀如来立像

千三百余年、當麻寺の中核を担う塔頭で、中将姫が住まれた寺として中将姫を慕う多くの方が参詣される。また、當麻寺練供養会式には深く関わり、菩薩講の運堂や二十五菩薩御面・装束を管理され、練供養会式には護念院を基地として重要な役割を担当する寺院です。

當麻山口神社

近郷16ヶ村（當麻・大橋・今在家・染野・・・）の鎮守産土神として広く信仰されてきた神社。山の神である大山祇命（大山津見神）が主祭神のはずが、合祀の天津彦彦火瓊瓊杵尊を主祭神として木花開那比売命と左右に配神され、文徳天皇（55代）の頃（853）には式内大社の官社であった。

摂社の當麻都比古神社の祭神・麻呂子皇子は用明天皇の皇子で聖徳太子の異母弟に当り、當麻氏の先祖とされる。當麻寺を創建した當麻の豪族・當麻氏の氏神として當麻津姫と二神をお祀りされている。

大和国の山口神社は、巨勢、加茂、當麻等の十四神社が在り、宮殿の用材を切り出す山の神だが、風水の神様でもあり、当神社の元の社地は現在の當麻寺内に在ったが、當麻寺の造営に際して、現在地に遷座した。

大山祇命（オオヤマツミノミコト） 天津彦彦火瓊瓊杵命（アマツヒコヒコホホニギノミコト） 當麻都比古神社（タイマツヒコジンジャ）

傘 堂 県指定有形民俗文化財

新在家の大池の東畔に、真柱一本のみで宝形造りの瓦屋根を支える総樑作りの建物で、江戸時代の前期に大和郡山藩主・本多政勝の菩提を弔う為、この地の郡奉行を務める吉弘統家が延宝二年（1674）に独自で建立した「位牌堂」。唐傘に似ている事から傘堂と呼ぶ。吉弘統家らが開いた大池で、水飢饉に苦しむ農民の救済の為に大池の築造の願主となった藩主と工事に尽力した人々の菩提を弔う供養塔として、利益を蒙った近在の新在家・今在家・染野の三地区の人々によって 三百年以上も傘堂は守られている。



傘 堂

石 光 寺 宗 派：浄土宗 山 号：慈雲山 本 尊：常行堂・阿弥陀如来 弥勒堂・弥勒菩薩



石光寺本堂

天智天皇の時（670年頃）、この地に靈光を放つ大石が有り、勅願して弥勒菩薩を彫刻し、役小角を開基として寺を建立される。聖武天皇の世に中将姫が境内の井戸で蓮糸を五色に染め上げて、當麻寺本尊の當麻曼荼羅を織ったという伝説から井戸を「染の井」と云い、通称『染寺』と呼ばれ中将姫伝説ゆかりの寺院。平成3年に発掘調査の結果、弥勒堂の前から白鳳時代の瓦や弥勒石仏の頭部、台座部分が出土し、寺創設の伝承が証明された。関西・花の寺二十五霊場の二十番札所で牡丹の名所で特に寒牡丹が珍しい。

當麻蹴速塚 * 野見宿禰と戦って敗れた當麻蹴速を偲んで建立された五輪塔

『日本書紀』によると當麻蹴速は大和國當麻邑で強力を豪語し、対戦を求めていた処、これを聞いた垂仁天皇（11代）が出雲國（桜井市）の勇士で評判の高い野見宿禰を召し寄せ、穴師（桜井市）に於いて『すまひ』（相撲）で対戦させ、七日間の戦いの末に蹴速は命を落とします。天覧相撲の始りで国技相撲の原点とされ、後世には相撲発祥の地・穴師に相撲の神様として「相撲神社」に當麻蹴速は野見宿禰と共に祭神とし祀られている。



悲劇のプリンス 大津皇子

大津皇子は天武天皇の第3皇子で天智天皇2年（663）に九州那大津で誕生した。母は天智の娘の大田皇女で鵜野讚良皇女（後の持統天皇）の姉に当り、順当にいけば皇后に成り得たが大津が4歳の時に死去した。姉の大来（大伯）皇女も伊勢神功の斎宮に成ったため、大津には後ろ盾が乏しかった。奈良時代の漢詩集「懐風藻」によれば大津は体格や容姿が逞しく、寛大で幼い頃から学問を好み書物を良く読み、その知識は深く、見事な文章を書いた。成人してからは武芸を好み、巧みに剣を扱った。その人柄は自由気ままで規則に拘らず、皇子でありながら謙虚な態度をとり、人士を厚く遇した。

このため、大津皇子の人柄を慕う、多くの人々の信望を集めたとあり、日本書紀にも同様の賛辞が延べられており、抜群の人物と認められていた様である。天武天皇は後継者を決める際に草壁と大津のどちらにすべきかを悩んだ様であるが、結局 鵜野皇后の強く推す草壁皇子を皇太子に選んだ。

朱鳥元年（686）9月に天武天皇が崩御すると、10月2日に親友の川島皇子の密告により謀反の意有りとして捕えられ、翌日磐余（いわれ）にある訳語田（おさだ）の自邸にて自害した。享年24歳。書記によれば妃の山辺皇女が殉死したとある。墓は二上山雄岳の山頂にあるが、葛城市側の麓に在る鳥谷口古墳が実際の墓であるとする説もある。



大津皇子二上山墓

1. 石川郎女との相聞歌



石川郎女は皇太子草壁の想い人であったが、大津の想い人でもあった。つまり三人は三角関係にあったが大津は石川郎女を皇太子から盗んだ。此の事も皇后から憎まれた原因の一つと考えられている。



日並皇子尊の石川郎女に贈り賜いし御歌一首

大名児 彼方野辺に 刈る草の 束の間も 我れ忘れぬや 卷2-110

大津皇子の窃に石川郎女を婚さし時に、津守連通その事を占い露はせるに、皇子の御作り賜いし歌

大船の 津守の占に 告らむとは まさしく知りて 我が二人寝し 卷2-109

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山の雫に 妹待つと 我立ち濡れぬ 山の雫に
卷2-107



石川郎女、和へ奉る歌

吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山の雫に ならましものを 卷2-108

2. 大津皇子の辞世の歌

ももづたふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠れなむ 卷3-415

3. 大来皇女の歌

大津皇子が姉の大来皇女に会うために、伊勢神宮に下向した時に大来皇女が作った歌

我が背子を 大和に遺ると さ夜更けて 暁露に わが立ち濡れし 卷2-105

二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が 独り越ゆらむ 卷2-106

大津皇子が二上山に移葬されたとき、大来皇女が作った歌

うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見む
卷2-165



鳥谷口古墳 形式：方墳 築造：7世紀後半頃 県指定史跡

二上山雄岳の東に派生する尾根の先端に築かれ、昭和58年（1983）土砂取の工事中に偶然発見され、地名の小字名・鳥谷口から命名される。墳丘の半分は破壊されていたが、墳形は方墳で規模は一辺が7.6mに復元される。墳丘には大型の割石を敷き詰めた精緻な貼石が施され、埋葬施設は横口式石槨と呼ばれる小さな石室。



鳥谷口古墳発掘時

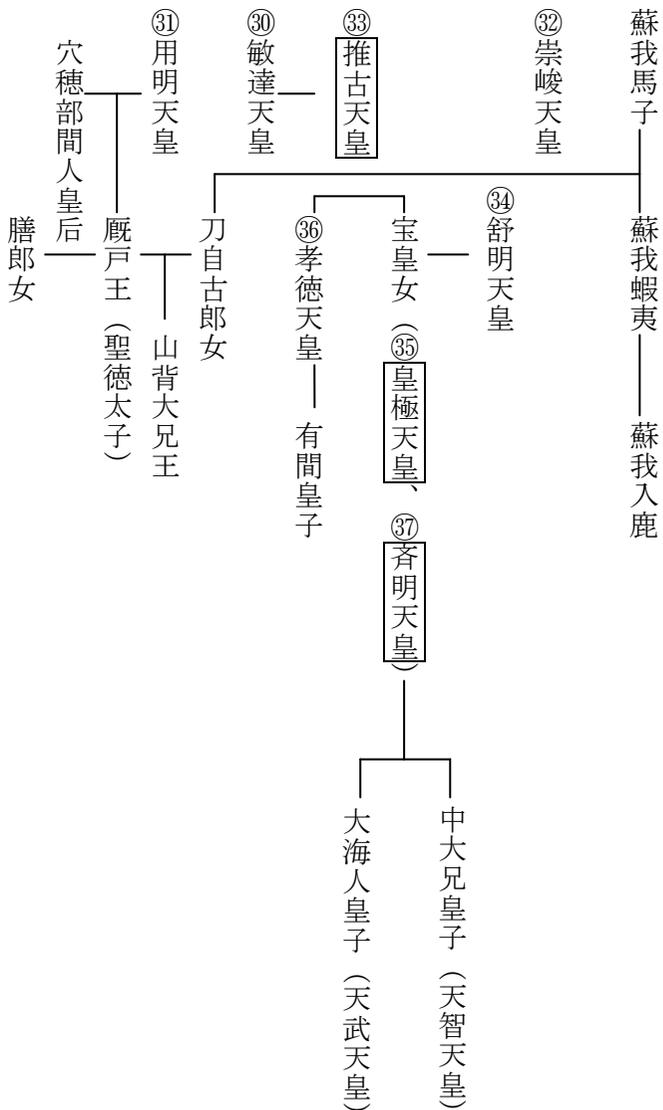
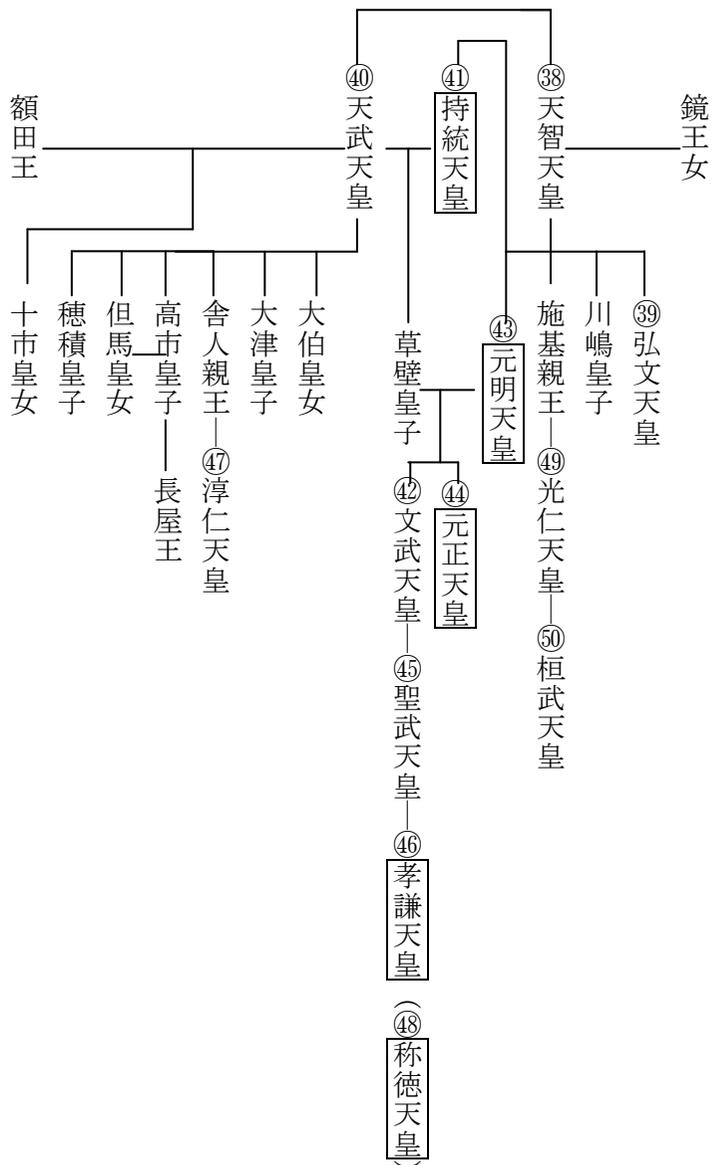
石槨は二上山の凝灰石を組み合わせたもので、内法は長さ158cm、幅60cm、高さ70cmの小空間で、底石・天井及び北側石に加工途中の家形石棺の蓋石等を大量に使用されている事から、被葬者については非業の死をとげて、二上山に葬られたと言う大津皇子の墓とする説が

あります。大津皇子は罪人扱いをされているので、古墳の大きさは当時の墓制では最低の規模であり、調査で発見された遺物は須恵器・土師器だけで7世紀後半から末のものだと推定され、古墳の造営と大津皇子の死亡時期が合い、悲劇の皇子が眠るのでしょうか。

この時代の古墳は丘陵の南斜面に造られる事が多く、山の頂上に造る事は有り得ず、他にも例が無い様です。大津皇子の宮内庁治定の墳墓を二上山山頂に決められたのは幕末の頃で、二上山雄岳山頂（517m）に「大津皇子二上山墓」として佇みます。



鳥谷口古墳



- 538年 ②⑨ 欽明天皇の時に百濟より仏教伝来する
- 645年 乙巳の変 (大化改新)
- 658年 有間皇子藤白坂 (海南市) で刑死す (十九才)
- 663年 白村江 (はくすきのえ) の戦い
- 672年 壬申の乱
- 686年 天武天皇崩御、大津皇子死賜う (二四才)